

# 仏教音楽 人物伝

- 3 -

福本 康之

藤井 清水 (1889 ~ 1944)

Kiyomi Fujii

約1900点の作品を遺し  
民謡研究で知られる作曲家

## 大正期の仏教讃歌に伴奏つける

どのような作品をどれだけ発表したか、気になるところで。しかし、委嘱によって書かれた作品は皆無なのです。ではなぜ宗派は、校訂者という重責の任を彼に委ねたのでしょうか。

当時、日本楽壇を代表する作曲家・山田耕柝は、藤井の才能を高く評価していました。そして二人は、仏教音楽協会（昭和戦前期に仏教讃歌

の興隆に向けて協力関係にありました。藤井に白羽の矢が立ったのは、おそらく山田が認めたその才能と、仏教音楽協会での縁（同協会には本願寺派関係者も多数参画していました）があつたことでしょう。

音楽作品は、メロディーの良し悪しもさることながら、伴奏によってガラリと雰囲気が変わり、評価も違ってくるものです。その意味で、伴奏を付した作品が今日の宗門における定番となっていることに鑑みれば、藤井の功績は決して忘れることのできないものです。

讃歌集の発刊からわずか4年後、藤井は55歳の若さで亡くなります。もう少し長生きしていれば、藤井による本願寺派オリジナルの仏教讃歌が生まれていたかも知れぬ、と思うのは筆者だけでしょうか…。

（本願寺派総合研究所  
仏教音楽・儀礼研究室長）



広島県呉出身、真宗門徒であった藤井清水

《みほとけにいだかれて》や旧譜の《恩徳讃》など、大正期に発表された仏教讃歌のいくつかには、ある共通点があります、それは何でしょうか？ 答えは、今日親しまれている伴奏が、作曲者自身によるものではなく、藤井清水なる人物が、のちに創ったものである、ということ。それら藤井による伴奏の多くは、1940（昭和15）年に本願寺派から発行された『仏

教讃歌集』で発表されました。この讃歌集は、約140点の仏教讃歌を収録し、編纂に際して作品校訂も行われた初の本格的なもの。このとき藤井は唯一の校訂者として、メロディーのみであったそれまでの作品に伴奏を付けたのでした。その数は36点。収載作品の約4分の1を占めています。

こうした宗派での実績を知ると、宗派の委嘱で藤井が、